

起源は定かではありませんが、15世紀末の記録が残っています。与那国花織、与那国ドゥタティ(平織)、与那国カガンヌブー(細帯)、与那国シダディ(手巾)の4種の織物があります。原料は絹糸、綿糸、麻糸などで、染料は地元の植物染料を用いています。

与那国織（よなぐにおり）

心を込め織られる織物

シダディ(手巾)は旅の安全と健康を祈る「守神」として織られていましたが、人頭税以降は、思いを託す「思いのシダディ」として織られるようになったと伝えられています。またカガンヌブー(細帯)は、女性から男性への愛の告白として送られ「夫婦絆」という意味があったそうです。







起源は13世紀頃、糸芭蕉の原皮から取れる糸を手で績み、絣糸は手くくりし、琉球藍、相思樹(そうしじゅ)等の植物染料で染め、織り上げます。沖縄固有の織物で、軽くてさらりとした風合いをもち、肌にべとつかないので、古くから人々に愛されています。

喜如嘉の芭蕉布（きじょかのばしょうふ）

原材料から地元産

糸芭蕉から糸が取れるまで3年もかかり、一反仕上げるのに必要な糸芭蕉の数は約200本にもなります。このように、糸芭蕉の栽培から織物の完成まで、一貫して手作業で製作されていることが喜如嘉の芭蕉布の大きな特徴です。





伝 Okinawa's Traditional Crafts 沖縄の伝統的工芸品 その3



起源は未詳ですが、記録の上では17世紀初めの薩摩への貢納布(こうのうふ)として知られています。苧麻(ちょま)を原料として絣は手くくり又は、すり込み捺染(なっせん)で、染料は琉球藍や、クール(紅露)等の植物染料を用いています。

八重山上布（やえやまじょうふ）

大正天皇皇后両陛下への献上品

大正天皇即位を奉祝して、十文字柄と亀の甲柄を各一反ずつ織り上げ、天皇・皇后両陛下に献上されました。八重山上布は、苧麻(ちょま)の繊維を原料に織られた白上布で、風通しがよく、夏の衣服としては最適です。





綿糸をインド藍、琉球藍、フクギ、クール(紅露)等の植物染料で染めた絣織物で、たてうね織の一種です。主に南国的な明るさを持つ帯で、ネクタイや袋物を生産しています。ミンサーの模様は5つと4つの組み合わせが交互に織られ「いつ(五つ)の世(四つ)までも末永く」という願いが込められています。



八重山ミンサー（やえやまみんさー）

シルクロードを通して伝わった？

八重山ミンサーの起源はアフガニスタンの小さな絣の帯と言われており、チベット、中国を経て伝来したと言われております。なお、沖縄本島で製織されている首里ミンサー、読谷山ミンサーは南方の紋織りの流れといわれています。



